

【資料 1 - 4】

青森県立高等学校教育改革推進計画に関する  
地区意見交換会（上北）における主な意見  
<整理案>

平成 29 年 1 月 26 日



# 目次

1	上北地区の中学校卒業生数の推移と全日制課程の学級数の見込み.....	1
2	全日制課程の学校規模・配置に関する意見.....	2
(1)	重点校、拠点校、地域校について.....	2
(2)	委員の意見に基づく学校配置シミュレーション.....	3
ア	平成29年度に生徒を募集する全ての高校を配置する場合.....	3
イ	上北地区の重点校を三本木高校、三沢高校とし、農業科、工業科、商業科の拠点校を配置する場合.....	5
ウ	農業科、工業科、商業科のいずれかと普通科を統合して新設校を配置する場合.....	7
エ	六戸高校と十和田西高校の普通科を統合し、十和田西高校の観光科の学習内容を七戸高校の総合学科に引き継ぐ場合.....	9
(3)	その他の意見.....	11
3	定時制課程及び通信制課程の配置に関する意見.....	12
【参考1】	委員名簿（上北地区）.....	13
【参考2】	オブザーバー名簿（上北地区）.....	14
【参考3】	地区意見交換会の開催状況（上北地区）.....	14

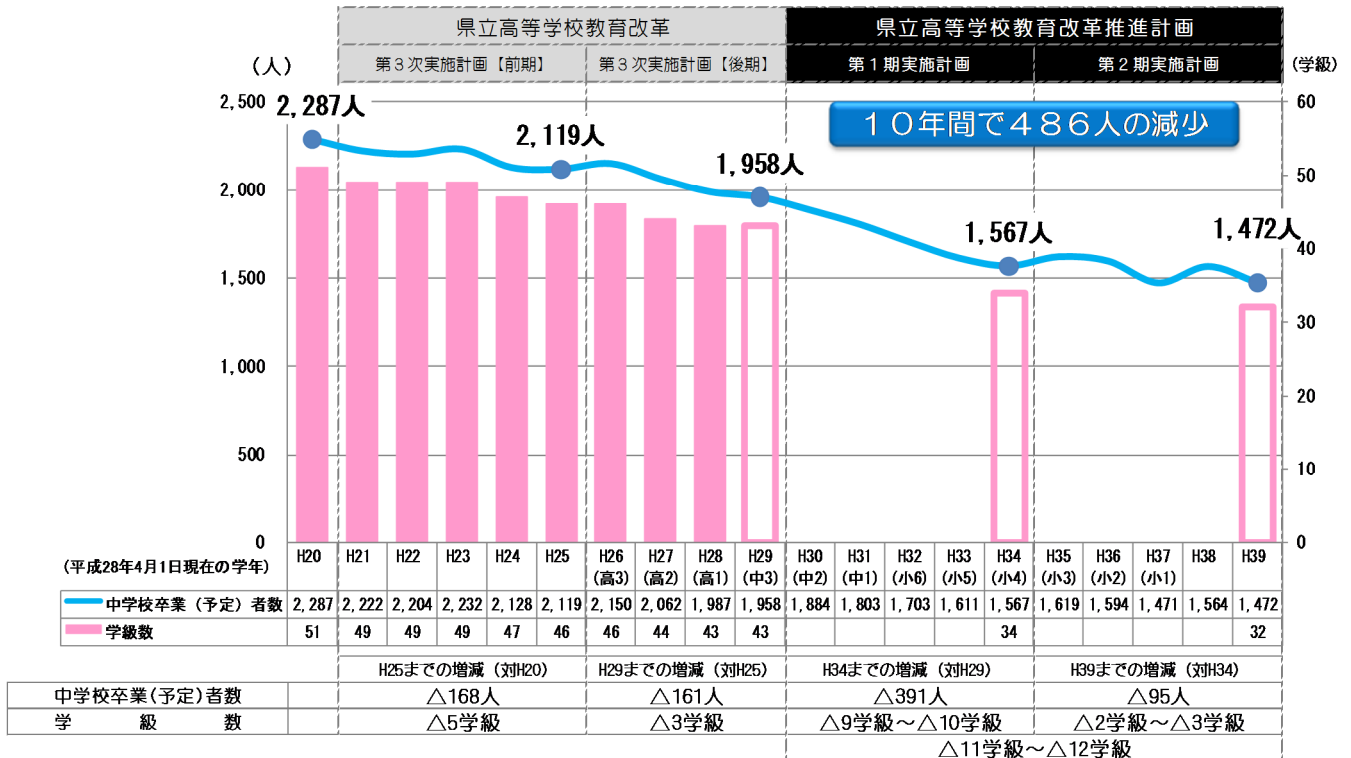
# 1 上北地区の中学校卒業生数の推移と全日制課程の学級数の見込み

※中学校卒業(予定)者数は、各年3月。

平成29年度以降は、平成28年5月1日現在の児童生徒数をもとに県教育庁高等学校教育改革推進室において推計。

※平成29年度の学級数は、県立高等学校教育改革第3次実施計画【後期】によるもの。

平成30年度以降の学級数は、これまでの高等学校進学率、他県・他地区との流出入等の状況を勘案し、算出。



			第1期実施計画	第2期実施計画
試案における候補校			H29	H39
重点校	三本木高校	6学級	△9学級 (対H29)	△11学級 (対H29)
拠点校	三本木農業高校	5学級		
地域校※	六ヶ所高校	2学級		
重点校等の合計		13学級		
連携校	三沢高校	6学級		
	十和田工業高校	5学級		
	七戸高校	4学級		
	百石高校	4学級		
	三沢商業高校	4学級		
	野辺地高校	3学級		
	十和田西高校	2学級		
	六戸高校	2学級		
連携校の合計		30学級		
上北地区全体の合計		43学級	34学級	32学級

※基本方針に定める地域校の方向性に基づき、2学級規模の地域校については、入学者数が40人以下の状態が2年間継続した場合、原則として1学級規模とします。また、1学級規模の地域校については、募集人員に対する入学者数の割合が2年間継続して2分の1未満となった場合には、当該高校の所在する市町村等と募集停止等に向けて協議します。

## 2 全日制課程の学校規模・配置に関する意見

### (1) 重点校、拠点校、地域校について

#### ① 全般

- 重点校、拠点校の配置について、大筋では同意している。(第1回)
- 重点校、拠点校、地域校の配置については、子どもたちのことを第一に考えて進めてほしい。(第1回)
- 6地区において、高校教育の質が高いレベルで確保されている重点的学校、拠点の学校の継続的な配置を含め、重点校、拠点校、地域校の配置について、よく考える必要がある。(第1回)
- 重点校・拠点校が各校とどのような連携をするかについては、具体的な取組を考える上で相当な研究が必要である。(第1回)
- 地域住民にとって、三本木高校や三沢高校は進学校、三本木農業高校や十和田工業高校は実業系の高校という捉え方があることから、あえて「重点校」「拠点校」「連携校」と分ける必要性はないのではないかと。(第2回意見等記入票)

#### ② 重点校

- 子どもたちが将来リーダーとなるために活躍できる場や全国レベルの学習環境が地域として必要であることから、重点校は必要であると考え。(第1回)
- 現在は就職率よりも進学率の方が上回っている状態であるため、重点校の設置は大事なことであり、重点校と連携校が情報交換等しながら進学に力を入れていけば、全国や世界で活躍できる人材を育成できると思う。(第1回)
- 重点校について、地区内に複数校設置し、競い合いながらレベルアップを図ることが出来たら良いと思う。(第1回意見等記入票)
- 重点校の学校規模は、6学級以上を前提に考える必要がある。(第1回)
- 重点校が平成39年度まで6学級規模を維持することにより生徒の学力を保障できるのか疑問である。(第2回)
- 重点校においては、医師だけではなく、看護師などの専門分野に生かせるような教育も必要である。(第1回)
- 重点校が求める生徒像は、もう少し地域の実情に合ったものとし、教育の質の保障について考えてほしい。(第1回)
- 青森県全体の東京大学合格者数を見ても、岩手県立盛岡第一高校1校の合格者数に届いていない現状から、重点校には既成概念の枠を外した取組が求められる。また、医師や弁護士を目指す学校教育を推進するためには、県立三本木高校附属中学校との関係を整理する必要がある。(第1回意見等記入票)

#### ③ 拠点校

- 農業が盛んな地域であるため、農業科の拠点校を設置する案に賛成である。(第1回)
- 上北地区は、土木建設会社が多く存在する地域であり、地域ニーズを考慮し、十和田工業高校を拠点校とすべきである。(第1回)
- 三沢商業高校は、高崎商科大学の高大連携プロジェクト北海道・東北ブロック協定校として認定され、商業高校としては全国トップクラスにあることから、拠点校とすべきである。(第1回)

#### ④ 地域校

-

(2) 委員の意見に基づく学校配置シミュレーション

ア 平成29年度に生徒を募集する全ての高校を配置する場合

	第3次実施計画	青森県立高等学校教育改革推進計画					
		第1期実施計画		第2期実施計画			
		H29		H34	H39		
重点校	三本木 6学級		三本木 6学級		三本木 6学級		
拠点校	三本木農業 5学級	△1学級 →	三本木農業 4学級		三本木農業 4学級		
連携校	十和田西 2学級	△1学級 →	十和田西 1学級		十和田西 1学級		
	六戸 2学級	△1学級 →	六戸 1学級		六戸 1学級		
	三沢 6学級	△1学級 →	三沢 5学級	△2学級 →	三沢 ○学級		
	野辺地 3学級	△1学級 →	野辺地 2学級		野辺地 ○学級		
	七戸 4学級	△1学級 →	七戸 3学級		七戸 ○学級		
	百石 4学級	△1学級 →	百石 3学級		百石 ○学級		
	十和田工業 5学級	△1学級 →	十和田工業 4学級		十和田工業 ○学級		
	三沢商業 4学級	△1学級 →	三沢商業 3学級		三沢商業 ○学級		
	小計	41学級	△9学級 →		32学級	△2学級 →	30学級
	地域校	六ヶ所 2学級			六ヶ所 2学級		六ヶ所 2学級
合計	43学級	△9学級 →	34学級		△2学級 →	32学級	

### ① シミュレーションの基となった意見

- 2学級、3学級規模の学校で、どのようにして質を落とさない高校教育ができるのか、地域と連携してどのような高校教育ができるのかといった議論が必要である。(第1回)
- 2学級規模の十和田西高校は統合を検討することになるのではないかとと思うが、観光科という特色ある学科を有し、地域貢献に取り組んでいるため、是非存続してほしい。(第1回)
- 野辺地高校は、北部上北地域の生徒が通学する上で過度の負担なく、大学に進学ができる学校として必ず配置してほしい。(第1回)
- 三沢商業高校は、過去3年間の在校生の出身中学校が、三沢市を中心に上北郡、三八地域の39校となっており、広域からの入学希望者が非常に多いことを考慮してほしい。(第1回)
- 百石高校は、生徒にとって複数の学科を有する高校として貴重な存在である。(第1回)

### ② 期待される効果等

○

### ③ 更に検討を要する課題等

- 活気のある教育活動を考えると、望ましい学校規模は4学級以上だと思う。(第1回)
- 学級数が少なくなっても学校を残した結果、学校に活気がなくなるようであれば子どもたちにとって良くない。(第1回)
- オール青森の視点で、各地域の学校を支援していくことを考えれば、一定規模の高校は残した方が良い。(第1回)
- 1学級規模や2学級規模の学校では、社会性や人間性が磨かれにくいと考えるため、学校規模は3学級、4学級以上にしてほしい。(第2回)
- 子どもたちを育てる環境としては、1学級規模の学校では難しいため、少なくとも2学級以上は必要だと考える。(第2回)
- 1学級規模となった場合、開設できない科目が多くなることを考えると、高校教育を受ける機会の確保が本当に可能なのか疑問を感じる。(第2回意見等記入票)
- 子どもたちが減っていく中、学校規模の標準は、果たして4学級以上で良いのかという疑問を感じる。(第1回)

イ 上北地区の重点校を三本木高校、三沢高校とし、農業科、工業科、商業科の拠点校を配置する場合

	第3次実施計画	青森県立高等学校教育改革推進計画			
		第1期実施計画		第2期実施計画	
		H29		H34	
重点校	三本木 6学級		三本木 6学級		三本木 6学級
	三沢 6学級		三沢 6学級		三沢 6学級
	三沢商業 4学級		三沢商業 4学級		三沢商業 4学級
拠点校	三本木農業 5学級		三本木農業 ○学級		三本木農業 ○学級
	十和田工業 5学級		十和田工業 ○学級		十和田工業 ○学級
	十和田西 2学級		十和田西 ○学級		十和田西 ○学級
連携校	野辺地 3学級	△9学級 →	野辺地 ○学級	△2学級 →	野辺地 ○学級
	七戸 4学級		七戸 ○学級		七戸 ○学級
	六戸 2学級		六戸 ○学級		六戸 ○学級
	百石 4学級		百石 ○学級		百石 ○学級
	小計	4 1学級	△9学級 →	3 2学級	△2学級 →
地域校	六ヶ所 2学級		六ヶ所 2学級		六ヶ所 2学級
合計	4 3学級	△9学級 →	3 4学級	△2学級 →	3 2学級



### ① シミュレーションの基となった意見

- 重点校について、地区内に複数校設置し、競い合いながらレベルアップを図ることが出来たら良いと思う。(第1回)
- 重点校は地区で1校となると、その学校だけに力が注がれる印象を受ける。(第1回)
- 上北地区は、土木建設会社が多く存在する地域であり、地域ニーズを考慮し、十和田工業高校を拠点校とすべきである。(第1回)
- 三沢商業高校は、高崎商科大学の高大連携プロジェクト北海道・東北ブロック協定校として認定され、商業高校としては全国トップクラスにあることから、拠点校とすべきである。(第1回)

### ② 期待される効果等

- 相互に切磋琢磨することの効果が大いと思われるため、重点校、拠点校を複数配置することに賛成である。(第2回意見等記入票)

### ③ 更に検討を要する課題等

- 重点校の学校規模は6学級以上を標準としているが、生徒数が全体的に減少していく中で、高校教育の質の確保・向上が可能なのか。重点校の規模を維持していくために、これまで連携校に入学していた生徒を重点校が受け入れることになるか考える。その結果、重点校の合格基準が下がるのではないかと懸念される。(第1回)
- 「ア 平成29年度に生徒を募集する全ての高校を配置する場合」との違いは、重点校等の学校数だけであり、思い切った統合・再編をしない限り、改革にはつながらないと思う。(第2回意見等記入票)

ウ 農業科、工業科、商業科のいずれかと普通科を統合して新設校を配置する場合

	第3次 実施計画	青森県立高等学校教育改革推進計画									
		第1期実施計画			第2期実施計画						
		H29	H34			H39					
		<パターン1>	<パターン2>	<パターン3>	<パターン1>	<パターン2>	<パターン3>				
重点校	三本木 6学級	三本木 6学級	三本木 6学級	三本木 6学級	三本木 6学級	三本木 6学級	三本木 6学級				
拠点校	三本木 農業 5学級	新設校 農業科 ○学級 普通科 ○学級	三本木 農業 ○学級	三本木 農業 ○学級	新設校 農業科 ○学級 普通科 ○学級	三本木 農業 ○学級	三本木 農業 ○学級				
連携校	十和田西 2学級	△9学級 →	新設校 工業科 ○学級 普通科 ○学級	新設校 工業科 ○学級 普通科 ○学級	十和田 工業 ○学級	新設校 工業科 ○学級 普通科 ○学級	十和田 工業 ○学級				
	六戸 2学級		三沢商業 ○学級	三沢商業 ○学級	新設校 商業科 ○学級 普通科 ○学級	三沢商業 ○学級	三沢商業 ○学級	新設校 商業科 ○学級 普通科 ○学級			
	十和田 工業 5学級		三沢 ○学級	三沢 ○学級	三沢 ○学級	三沢 ○学級	三沢 ○学級	三沢 ○学級			
	三沢商業 4学級		野辺地 ○学級	野辺地 ○学級	野辺地 ○学級	野辺地 ○学級	野辺地 ○学級	野辺地 ○学級			
	三沢 6学級		七戸 ○学級	七戸 ○学級	七戸 ○学級	七戸 ○学級	七戸 ○学級	七戸 ○学級			
	野辺地 3学級		百石 ○学級	百石 ○学級	百石 ○学級	百石 ○学級	百石 ○学級	百石 ○学級			
	七戸 4学級		小計	△9学級 →	3 2学級	3 2学級	3 2学級	△2学級 →	3 0学級	3 0学級	3 0学級
	百石 4学級		地域校		六ヶ所 2学級	六ヶ所 2学級	六ヶ所 2学級		六ヶ所 2学級	六ヶ所 2学級	六ヶ所 2学級
合計	4 3学級	△9学級 →	3 4学級	3 4学級	3 4学級	△2学級 →	3 2学級	3 2学級	3 2学級		

① シミュレーションの基となった意見

- 中学校の段階で将来像が固まっていない子どもたちは、普通科を選択する傾向がある。そこで、大学のキャンパス制のように農業科、工業科、商業科に加えて普通科の校舎を設置して、自分の将来に照らして編入できるような学校をつくることで社会にマッチした子どもたちを育成することができるのではないか。（第2回）

② 期待される効果等

- 

③ 更に検討を要する課題等

- 

④ その他

- 大学のキャンパスをイメージして、普通科、農業科、工業科、商業科のある高校を設置して、子どもたちのニーズに合わせて普通科から農業科、工業科、商業科への編入を可能にするなど、1学級規模の学校が増えそうなどときには思い切った発想も必要ではないか。（第2回意見等記入票）

エ 六戸高校と十和田西高校の普通科を統合し、十和田西高校の観光科の学習内容を七戸高校の総合学科に引き継ぐ場合

	第3次実施計画		青森県立高等学校教育改革推進計画		
	H29	第1期実施計画		第2期実施計画	
			H34		H39
重点校	三本木 6学級		三本木 6学級		三本木 6学級
拠点校	三本木農業 5学級		三本木農業 〇学級		三本木農業 〇学級
連携校	六戸 2学級		新設校A (普通科) 〇学級		新設校A (普通科) 〇学級
	十和田西 普通科1学級 観光科1学級 2学級		新設校B (総合学科) 〇学級		新設校B (総合学科) 〇学級
	七戸 4学級		十和田工業 〇学級	△2学級 →	十和田工業 〇学級
	十和田工業 5学級	△9学級 →	三沢 〇学級		三沢 〇学級
	三沢 6学級		野辺地 〇学級		野辺地 〇学級
	野辺地 3学級		百石 〇学級		百石 〇学級
	百石 4学級		三沢商業 〇学級		三沢商業 〇学級
	三沢商業 4学級				
小計	41学級	△9学級 →	32学級	△2学級 →	30学級
地域校	六ヶ所 2学級		六ヶ所 2学級		六ヶ所 2学級
合計	43学級	△9学級 →	34学級	△2学級 →	32学級

① シミュレーションの基となった意見

- 六戸高校と十和田西高校の普通科の統合は考えられないか。十和田西高校の観光科を七戸高校に組み入れることは難しいのか。（第2回意見等記入票）

② 期待される効果等

③ 更に検討を要する課題等

### (3) その他の意見

#### (具体的な学校規模・配置について)

- 生徒のニーズに対応するため、将来的には異なる学科を複数有する学校も必要になると思う。(第1回)
- 特定の地域においては、昨年度よりも中学生が増えているという実情を考慮した学校配置としてほしい。(第1回)
- 生徒数の減少を前提とした計画では、学校規模の標準を満たさない学校の統廃合など、一方向だけになるのではないか。(第1回)
- 三本木高校が重点校で、重点校に準ずる学校が三沢高校となれば、それ以外の学校で、普通科を希望する七戸町、東北町、十和田市、三沢市、六戸町の生徒は、他の自治体に所在する学校に進学するか、職業教育を主とする専門学科の高校に進学するしかない。(第2回)

#### (学科等について)

- 普通科志望者は全中学生の半分以上を占めているが、上北地区において将来削減対象になると思われる2学級以下の学校のほとんどは普通科であることから、これらの学校が募集停止となれば、ますます普通科の定員割合が減ることになる。(第1回)
- 七戸町、東北町、十和田市、三沢市、六戸町で普通科を希望する生徒の割合は50%強である。それに対して、これらの自治体における普通科の割合は40%強であり、学校規模の標準を踏まえて六戸高校、十和田西高校が統合されると、普通科の割合が更に少なくなる。(第2回)
- 三沢高校は、英語科のノウハウを普通科の教育活動に還元することが考えられる。(第1回)
- 専門高校に入学後、進路志望の変更等に伴い、普通科の高校に年度途中で編入できるような仕組みがあれば中学校としては助かる。(第1回)
- 専門学科で学んで大学に進学する生徒が増えてきていることから、専門高校であっても普通科の進学校のように共通教科にも力を入れて、教育の質を向上させるような取組をしてほしい。(第1回)
- 六ヶ所高校において原子力、風力や太陽光に関する専門家から指導を受けられるような魅力的な学科をつくり、生徒を全国募集しても良いのではないか。(第1回)
- 現状として建設産業の人材不足があるため、地域産業を生かした資格取得を通して専門職に就けるような学校づくりをしてほしい。(第1回)
- 青森の魅力をアピールすることが足りないと感じている。食物調理科や観光科は子どもたちにとって興味のある学科だと思うので、もっと県外にもアピールした方が良いのではないか。(第2回)

#### (生徒の通学について)

- 東北町の生徒は、高校への通学に青い森鉄道や路線バスを利用しているが、最寄り駅までもかなりの距離があり、親にとっては送迎の負担が非常に大きい。十和田市内の高校に通学するには、年間約25万円の交通費が必要になるため、交通費の負担を緩和できるような施策の検討をお願いしたい。(第1回)
- 当町には高校がないため、通学支援については町でも考えていく必要があるが、県でも考えてほしい。(第2回)

#### (その他)

- 学校には人間形成ができる環境づくり、自分から意欲を持って学ぶ環境づくりが求められている。(第2回)
- 医療系を目指す教育に重点を置く学校、グローバル社会に対応できる能力を身に付けることに重点を置く学校を配置し、子どもたちが自らの希望で選択できるような学校というイメージを持てるようにしてほしい。(第1回)
- 普通科の1学級の定員は40人となっているが、35人という考え方はないのか。(第1回)
- 現在2学級から3学級規模の小規模校に対して、6学級規模の教育内容を求めることは不可能であるが、小規模校には小規模校のメリットがたくさんある。そのメリットをどのように生かすのかを総合的に考えていかなければならない。(第2回)
- 小規模校における1学級の募集定員数を減らして、マンツーマンで個人の力を伸ばすこともできるのではないか。(第2回)
- 三本木農業高校の寄宿舎を活用して、生徒を全国募集すれば良い。(第1回)
- 上北地区全体で全国募集ができるような体制づくりも考えていく必要がある。(第2回)
- 現在、情緒障害等の発達障害を抱える子どもたちが増えているが、中には非常に高い知能を持っている子どもたちもいる。そのような子どもたちが普通高校に進学しても高い知能を発揮できるような体制づくりをお願いしたい。(第2回)
- 高校教育を受ける機会の確保とは、入学定員数枠を設けるものではなく、中学生が進学したい学科の配置と定員数を考慮したものでなければならない。(第1回)
- 専門的知識を有する教員が各校を定期的に巡回して教科指導をすることも考えられる。(第2回)

### 3 定時制課程及び通信制課程の配置に関する意見

- 定時制課程・通信制課程の学校配置については、現状の配置に同意するが、特別な支援を必要とする子どもが増えているため、そのような子どもも一緒に高校教育を受けられるような取組も考えてほしい。(第1回)
- 不登校生徒の問題等に対応するためにも、最後のチャンスである定時制課程・通信制課程への入学は、定員内であれば生徒の希望を叶える方向であってほしい。(第1回)

【参考1】委員名簿（上北地区）

（敬称略）

区分	所属等	委員名	備考
市町村教育委員会	十和田市教育委員会 教育長	米田 省三	
	三沢市教育委員会 教育長	吉田 健	
	野辺地町教育委員会 教育長	浅利 能之	
	七戸町教育委員会 教育長	神 龍子	
	六戸町教育委員会 教育長	櫻田 泰弘	
	横浜町教育委員会 教育長	柏谷 弘陽	
	東北町教育委員会 教育長	漆戸 隆治	
	おいらせ町教育委員会 教育長	福津 康隆	
	六ヶ所村教育委員会 教育長	橋本 博子	
P T A 関係者	十和田市連合P T A 会長 （十和田市立三本木中学校P T A 会長）	岩間 貴	
	三沢市連合P T A 副会長 （三沢市立第五中学校P T A 副会長）	横田 涉子	
	上北郡連合P T A 会長 （野辺地町立野辺地中学校P T A 会長）	赤垣 義憲	
	青森県高等学校P T A連合会 上十三地区協議会 会長 （県立七戸高等学校P T A 会長）	三上 義也	
産業界	十和田商工会議所 副会頭	今泉 湧水	
小中学校長会	上北地方小学校長会 会長 （三沢市立木崎野小学校 校長）	富田 敦	
	上北地方中学校長会 副会長 （六ヶ所村立第一中学校 校長）	高橋 喜美夫	
	元県立三本木高等学校 校長	長谷川 光治	進行役



【参考2】オブザーバー名簿（上北地区）

（敬称略）

所 属 等	オブザーバー名	備 考
県立三本木高等学校 校長	長者久保 雅 仁	
県立十和田西高等学校 校長	對 馬 祐 之	
県立三沢高等学校 校長	福 士 順 一	
県立野辺地高等学校 校長	漆 館 栄 一	
県立七戸高等学校 校長	佐々木 孝 之	
県立六戸高等学校 校長	鈴 木 雅 博	
県立百石高等学校 校長	荒 川 由美子	
県立六ヶ所高等学校 校長	川 村 卓 也	
県立三本木農業高等学校 校長	瀧 口 孝 之	
県立十和田工業高等学校 校長	濱 中 瑞 洋	
県立三沢商業高等学校 校長	池 田 敏	
県立七戸養護学校 校長	伊 藤 清 治	

【参考3】地区意見交換会の開催状況（上北地区）

回	年月日	内容
1	平成28年 9月16日	○学校規模・配置に関する意見発表
2	平成28年11月16日	○第1回地区意見交換会での意見等を踏まえた学校配置シミュレーションに関する意見交換
3	平成29年 1月26日	○地区意見交換会委員の意見に基づく学校配置シミュレーションにおいて想定される効果・課題等に関する意見交換